

武田泰淳著『信念』考

—— 占領期の文学としての視座から ——

A study on the Shinnen [belief] by TAKEDA Taijun [武田泰淳]

—— from a view point of the literatures during the occupied period ——

長田真紀

OSADA Maki

キーワード：武田泰淳、『信念』、廣瀬武夫、『司馬遷』、『孫子』

占領下

—

戦後派作家・武田泰淳が、「オール讀物」（文藝春秋新社発行）昭和二十四年六月特大号に発表した『信念』¹は、ある將軍の銅像についての寓話的趣致をもつ短編小説である。

多くの寓話がそうであるように、この作品には、登場人物も時代も場所

（国）も特定されていない。そこには、時代や国を越える人間の生や世の営みの本質が語られ、諷刺されている。文学の普遍性である。しかし一方、その作品を生み出した作家は、決して架空の時間や場所を生きただけではなく、ある確かな時間と場所の中で生き、作品もそこから生まれたのである。同時代に、その作品を読んだ読者も然りである。

本稿では、武田泰淳が『信念』を発表した当時の特殊な時代と社会の様相を鑑みながら、作品執筆にあたり着想のきっかけとなったであろう歴史的事項や、戦後文学としての存在意義を考察していく。

二

『信念』には、「敗戦」「負け戦」といった言葉は全く使われていない。しかし、敗戦將軍の姿が描かれているのは、冒頭から明らかである。以下、最初に梗概を記す。

將軍は、人知れず帰郷した。誰にも会わず、また、もし誰かが將軍に会ったとしても、將軍とわからぬほど「憔悴」しきった姿であった。

將軍は、「古い城壁のある丘」に「堀を背にして」建てられていた自分の銅像を見に行った。「サアベルを握って傲然と町を見下して」いる銅像は、もはや「他人のやうで」あったが、將軍は「苦笑しながら」、その場に佇んでいた。

ある日、青年達によつて、銅像は打ち倒された。銅像の顔は、空を仰いで、やはり傲然としていた。

ふと見ると、銅像の石の土台に、老婆が一人「しやがみ込んで」いた。「この方は偉いお人だつたのに」「なにしろ遺骨も公報もあてになりませんで。あてになるのはこの御方だけですから」「あの方が生きてござらつしやれば、伴も生きてるでさ。あの方が死になさつたら、伴も死んでるでさ」。

老婆は目の前にいるのが、銅像の本人、將軍であることに全く気づかぬまま語り始める。老婆の息子は、將軍の師団に入隊していたのである。

將軍は、「ギョツとして足がすく」み、その場から離れた。

將軍は、「その日から老婆に遇ふのをおそれた」。銅像は「泥しぶきで汚れ」、まだ倒れたままであった。「自分の分身」が、「みじめに、ぶざま」に地面に転がっているのを悲しんだ將軍は、「いつそ堀の中へ落ちてしま

へばいいのに」と思い、自ら自分の銅像を堀に落とすべく努力するのであった。そしてある日、銅像は「枯草の斜面をすり落ち」、「鈍い音をたて、白い輪の泡を吐きながら堀の底へ沈んだ」。將軍は「呆然と」「堀の水面を」「見下して」いた。

その時、將軍は、後から「強い力で背を突かれ」、「前のめりに倒れた」。「何ていふことをするだ！ 罰あたり！」怒りに身体を震わせた老婆が夕闇の中に佇み、「何てまねをするだあ、あの御方に……」と、「呪ひ」、「唾をはきかけ」、「泣き叫びながら」丘を「走り降りて行つた」。

(引用文である「」内の表記は原文のまま)

このように『信念』では、青年たちの手で打ち倒され、最後は元將軍自らの手によつて堀の底にすり落とされる銅像が描かれている。

実はここには、敗戦後の日本の屈折した様相が、密やかに、そして巧妙に、織り込まれたのではないだろうか。

『信念』が発表された昭和二十四年は、敗戦後の占領下の真つ只中である。

第二次世界大戦に惨敗した日本は、昭和二十年八月十四日の御前会議において、連合国側からの対日降伏勧告「ポツダム宣言」を受諾するとする「御聖断」が下された。同日夜、「朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」と明言した、いわゆる「終戦の詔書」が發布され、翌八月十五日正午、天皇自らが朗読し録音されたその詔書が、ラジオで放送された。玉音放送である。

九月二日には、ミズリー艦上で、降伏文書調印が行われ、これをもって国際法上の戦闘行為は停止となった。しかし、日本の敗戦、降伏は、本当の意味での終戦・終結とはならず、アメリカ軍を中心とする連合軍最高司

令官総司令部(GHQ General Headquarters)による徹底的な占領下に置かれたのである。そして、アメリカ政府の意向に従った、日本の民主主義化、非軍国主義化を推し進めるべく、実に様々の、実に多くの占領政策が、GHQの主導で急激に、そして厳しく展開していった。

その一つが、軍国主義的な記念碑や銅像等の撤去であった。

昭和二十一年十一月三日の日本国憲法公布(施行は昭和二十二年五月三日)より二日早い同年十一月一日、「公葬等について」という内務・文部両省次官名の通牒発宗五十一号が、地方長官宛に出された。その「四」には、次のように記されている。

忠霊塔、忠魂碑其の他戦歿者の爲の記念碑、銅像等の建設並びに軍國主義者又は極端なる國家主義者の爲にそれらを建設することは今後一切行はないこと。現在建設中のものについては直ちにその工事を中止すること。尚現存するものの取扱は左に依らねばならない。

イ、學校及び其の構内に存在するものは之を撤去すること。

ロ、公共の建造物及びその構内又は公共用地に存在するもので明

白に軍國主義的又は極端なる國家主義的思想の宣傳鼓吹を目的とするものは、之を撤去すること。

前項のことは戦歿者等の遺族が私の記念碑や墓石等を建立することを禁止する趣旨ではない。

東京都では、翌昭和二十二年一月に、「忠魂塔、忠魂碑等の撤去審査委員会」が設置され、対象となる銅像の審議がなされた。そして、最初に撤去されることになったのが、日露戦争の軍神・廣瀨武夫中佐と杉野孫七兵曹長の銅像であった。

海軍軍人・廣瀨武夫(明治元年五月〜明治三十七年三月)^②は、日露戦争の際、旅順港内にロシア艦隊を封じ込める閉塞作戦において福井丸を指揮。敵の魚雷に当たり、退船する際、部下の杉野孫七上等兵曹を探すため福井丸に戻ったが、三度探索しても発見できず、やむなく救命ボートに乗りうつした直後、被弾して戦死した。即日、少佐から中佐に昇進(杉野は兵曹長に昇進)。以後、軍神とされた。

明治四十三年五月には、東京市(当時)神田万世橋駅前に、銅像が建立された。廣瀨中佐の立像の台座に杉野兵曹長が座り、その下にはさらに大きな台座が置かれた銅像であった。(※本稿末尾の絵ハガキを参照されたい。)

また、明治四十五年には、『尋常小學唱歌 第四学年』に次に掲げる唱歌「廣瀨中佐」^③が採られ(作詞者・作曲者不明)、学校教育の中でも広く周知されていた。

一、轟く砲音、飛來る彈丸

荒浪洗ふ、デツキの上に

闇を貫く、中佐の叫

「杉野は何處、杉野は居すや」

二、船内隈なく、尋ぬる三度

呼べど答へず、さがせど見えず

船は次第に、波間に沈み

敵弾いよ／＼、あたりに撃し

三、今はボートに、うつれる中佐

飛來る彈丸に 忽ち失せて
旅順港外 恨ぞ深き

軍神廣瀨と 其名残れど

武田泰淳は、大正七年四月、本郷区駒込の誠之小学校に入学している（大正十三年三月卒業）。おそらく、唱歌「廣瀨中佐」もよく知っていたであろう。

さて、廣瀨中佐の銅像（杉野兵曹長のものも）の撤去について、「朝日新聞」は、昭和二十二年七月二十三日（水曜日）の二面で、廣瀨中佐のうつ伏せに倒れた銅像の写真を付し、次のように報じている。（敗戦後間もないこの当時、「朝日新聞」は裏表一枚刷りでの発行だった。夕刊はない。なお引用にあたって、仮名遣い、旧漢字、読点等、そのママとした。写真は略。）

追放第一陣

廣瀨中佐銅像

追放銅像第一陣として神田万世橋の廣瀨中佐、杉野兵曹長の銅像の撤去作業が二十一日から都建設局の手で始められたがつり上げのワイヤーがブツリと切れたため中佐は寫眞のとおり轉落、二十二日は杉野兵曹長にかゝつた、銅像は金属会社へ拂下げられ、台石は入札される（寫眞は倒された廣瀨中佐の銅像）

また、「讀賣新聞」は、やはり昭和二十二年七月二十三日（水曜日）の二面で、次のように報じている。（敗戦後間もないこの当時、「讀賣新聞」も裏表一枚刷りでの発行だった。夕刊はない。なお引用にあたって、仮名

遣い、旧漢字、読点等、そのママとした。）

消えた東京名物

廣瀨中佐の銅像きのう取り拂い

東京名物のひとつとして親しまれてきた神田須田町の廣瀨中佐銅像も「追放旋風」のあおりをくつて廿一日ドウとばかり夏草の中に引き倒された――

都土木課の撤去工事がこの朝八時から始まったのだが、この巨体を台から引きおろすのは容易ではなく、中佐はうつ伏せに、杉野兵曹長は首へロープをかけられて同様無残な最期、台石と共に近く民間へ拂い下げとなるが、それまでは行く先きも定まらず、このまゝで夜露に打たれねばならぬという

見物していた顔馴染みの土地ツ子連中、さすがにこの工事には顔をそむけ、うつ向けの中佐をせめて仰向けにと両手に力をこめてたかつたが重くて動かばこそ――あきらめ切れずに須田町南町の「須南青年会」員卅人は今朝からお別れの日まで、連日この夏草のネグラを清掃する

当時、これらの報道が、武田泰淳の耳目に触れ、おおいに驚かしたのであることは想像に難くない。

廣瀨中佐の銅像が、「公葬等について」で指示された「明白に軍國主義的又は極端なる國家主義的思想の宣傳鼓吹を目的とするもの」に相当するかは、当時、個々の日本人の感情や見解は様々であり、簡単には結論を出せないものだったはずである。しかし、GHQの占領政策を速やかに実

行するべく、その第一号として廣瀨中佐の銅像が選ばれたのである。

三

廣瀨中佐の銅像は、本人が戦死した後に、顕彰するべく明治四十三年五月に建立された。そして、それから三十七年後の昭和二十二年七月、廣瀨が想像だにしなかった敗戦国日本、GHQの占領下日本で、撤去された。全ては本人が与かり知らぬことである。

一方、『信念』の將軍の銅像は、故郷の英雄としてすでに生前から建てられてあった。「サブエルを握つて傲然と町を見下してゐた」のである。凱旋將軍となれなかつた將軍は、もはや「元將軍」でしかなく、人知れずこっそりと自分の銅像を見に行くのである。

その銅像は、ある日、青年達によつて打ち倒される。

政權の転覆など、社会の価値観が大きく変われば、それまでの是は否となる。それまで崇められていた存在が、掌を返したように見向きもされなくなり、それどころか嘲笑され罵倒される。次の政權を握る者、そしてその新しい時代を生き、新しい社会を築く若者たちによつて否定されるのは世の常である。それまで崇められてきた銅像、とりわけ政治家や軍人の銅像は引き倒されても当然の面もある。

しかし『信念』の銅像は、それとどまらぬ。倒された銅像の土台にひとりの老婆がしゃがみ込み、相手が銅像の本人であることに気づかぬまま、息子が將軍の指揮する師団に入隊したこと、「この方は偉いお人だつたのに」「なにしろ遺骨も公報もあてになりませんで。あてになるのはこの御方だけですから」「あの方が生きてござらつしやれば、倅も生きてるでさ。あの方が死になつたら、倅も死んでるでさ」と語る。

老婆に遇うのを恐れ、自分の分身である銅像が、「みじめに、ぶざまである」ことを悲しんだ「元將軍」は、自ら銅像を堀の底へずり落とす。最後のとどめは自ら行ったのである。完全な自己否定である。

中国の兵書『孫子』には、優れた將軍の兵卒への関わり方として、次のように述べられている。

視卒如嬰兒	卒を視ること嬰兒の如し
故可與之赴深谿	故にこれと深谿に赴くべし
視卒如愛子	卒を視ること愛子の如し
故可與之俱死	故にこれと俱に死すべし

(地形編)第十

廣瀨中佐の行動は、言わば『孫子』のこのくだりの実践に他ならない。まさに「視卒如愛子 故可與之俱死」である。

しかし、近代の実際の軍隊において、少佐(戦死時)であった廣瀨が、上等兵曹(戦死時)であった杉野孫七を探すために福井丸に戻り三度も探索したことは、異例の、本来は有りうべからざる行動だったのでないだろうか。佐官である少佐の廣瀨が、下士官である上等兵曹のために命を落としたわけで、それゆえに社会は瞠目し、とりわけ庶民の心を揺さぶるものになったのであろう。そして造られた銅像も、廣瀨の立像の台座に杉野が座っているという、極めて珍しいスタイルのものであった。

一方、『信念』の將軍は、敗戦し、人目を忍んでこっそりと帰郷する。將軍の倒れた銅像の台座には、將軍の師団に入隊したという若者の母親(老婆)が座り、戦死公報も遺骨も信じられないと、將軍の存在に息子の

生還の一縷の希望を託す。老婆にとって将軍の存在は、唯一心の支えであり、生きた信念であった。しかし、将軍と老婆の息子はともに生還することも、ともに戦死することもなく、将軍は生き残り、老婆の息子は戦死したのである。

四

司馬遷は生き恥さらした男である。士人として普通なら生きながらへる筈のない場合に、この男は生き残った。口惜しい、残念至極、情なや、進退谷まつた、と知りながら、おめおめと生きてゐた。

これは、武田泰淳が昭和十八年に発表した『司馬遷』^①の冒頭である。武田泰淳の名を世に知らしめたデビュー作とも言える作品であり、傑作である。武田泰淳は、日中戦争に出征し戦地生活を送るなかで、司馬遷の世界を体得したということ^②を語っている。『司馬遷』^③には、明らかに武田泰淳の自己同一性を読み取ることができ、武田泰淳の文字に通底する本質がある。

『信念』の将軍もまた「生き恥さらした男」に違いない。それでも「生き残った」。「おめおめと生きてゐた」。さらには、かつて将軍として国の英雄であった自らの銅像を堀の底にすり落とし、過去の自分を否定し捨て去ったのである。

敗戦によって日本は瓦解した。それでも生き残った国民は、まだ生きて行く。生き延びたことの安堵と喜び、そして、ともかく戦争が終わったこととの解放感を嘔み締めながら、同時に、戦死した者達への疚しさも抱え込みながら。

『司馬遷』が、敗戦後の日本をも予言する作品となったように、『信念』は、敗戦後の占領下における日本のある一つの姿を、戦争に生き残った者達が敗戦後の日本をどう生きているかを、寓話として忍ばせたのである。

注

① 『信念』の初出誌については、『増補 武田泰淳全集』の別巻『増補 武田泰淳研究』(昭和五十五年三月 筑摩書房)に収録されている古林尚・制作「武田泰淳年譜」(今日、武田泰淳年譜の定本ともいうべき年譜である)をはじめ、従来、昭和二十四年十月とされてきた。しかし、この度、初出誌の調査を行ったところ、昭和二十四年六月特大号の「オール讀物」であることが判明した。

② 『広瀬武夫全集』下巻(昭和五十八年十二月 講談社)の「年譜」に記載の「明治元年五月二十七日」の誕生に拠る。

③ 『新訂文部省発刊 尋常小學校唱歌適用遊戲 第四學年用』(大正二年六月)

④ 東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年四月 日本評論社

⑤ 「自序」(東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年四月 日本評論社)で次のように語っている。

私が「史記」について考へ始めたのは、昭和十二年、出征してからである。はげしい戦地生活を送るうち、長い年月生きのびた古典の強さが、しみじみと身にしみて来て、漢代歴史の世界が、現代のこのやうに感じられた。歴史のきびしき、世界のきびしき、つまり現実のきびしきを考へる場合に、何かよりどころとなり得るものが、「史記」には有る、と思はれた。

※



廣瀬中佐の銅像の絵ハガキ。撮影者・撮影年時不明。筆者(長田)蔵